

一橋大学グローバルCOEプログラム

社会科学の高度統計・実証分析拠点構築

Research Unit for Statistical and Empirical Analysis in Social Sciences

## Global COE Hi-Stat Newsletter

No. 7 (January 2012)

## 目次

「Christopher Sims 教授のノーベル賞受賞に際して」	渡部敏明... 1
「Hitotsubashi-UNSW Conference on International Trade and FDI 2011 開催報告」	笹原彰... 3
「ザンビア農村部フィールド調査報告」	三浦憲... 4
ディスカッションペーパー...6	
研究会 開催実績...7	
受賞...9	

## Christopher Sims 教授のノーベル賞受賞に際して

渡部敏明  
統計理論グループ  
一橋大学経済研究所

Christopher Sims 教授が Thomas Sargent 教授と共に 2011 年度ノーベル経済学賞を受賞した。Sims 教授は私のイェール大学時代の指導教官だったので、すぐにお祝いのメールを送ったが、改めて心からおめでとうと言いたい。ノーベル賞受賞者に対して失礼かもしれないが、私はいつも Chris と呼ばせてもらっており、Sims 教授と呼ぶのは違和感があるので、以下ではいつも通り Chris と呼ばせてもらうことにする。

Chris はハーバード大学で経済学 Ph.D. を取得した後、ミネソタ大学、イェール大学で教え、現在はプリンストン大学で教授をしている。ちなみに、学部はハーバードの数学科を 2 番の成績で卒業したそうである。運良く、私がイェールの大学院生だった時にミネソタから移って来られて、指導をしてもらった。

今回のノーベル賞はマクロ計量分析の研究に対して

与えられたものだが、計量経済学者としての Chris の特徴はベイズアンということである。ベイズ推定では、モデルのパラメータを確率変数であると考え、まずデータを観測する前の分布である事前分布を設定し、それをベイズの定理によってデータを観測した後の事後分布に更新した後、事後分布を使ってパラメータを推定する。以前、Chris になぜベイズアンになったのか聞いたところ、政府や中央銀行が政策を変えるとモデルのパラメータの値が変わるという「ルーカス批判」以来、モデルのパラメータは定数ではなく確率変数として捉えるべきだと思ったそうである。ベイズ推定は、古くは事後分布の導出が難しいためそれほど用いられなかったが、以下で述べるマルコフ連鎖モンテカルロ法 (Markov chain Monte Carlo; MCMC) と呼ばれるシミュレーションの方法の開発により、現在ではかなり

普及しつつある。

Chrisに指導教官になってもらった当時、私はマクロではなく、ファイナンスの確率的ボラティリティ変動 (stochastic volatility; SV) モデルについて研究していた。このモデルは尤度を解析的に求めることが難しいので、Chrisに相談に行ったところ、MCMCという手法を使うように言われ、これきっかけとなり、その後MCMCを使うようになった。MCMCは1回前にサンプリングされた値を用いて次の値をサンプリングする方法の総称である。この方法を使うと、複雑なモデルでもパラメータを事後分布からサンプリングできるので、ベイズ推定を行える。MCMCは物理で使われていたのが、その当時ようやく計量経済学に応用され始めたばかりだったので、文献も少なく、ほとんどChrisにマンツーマンで教えてもらった。

この方法はパラメータを推定するためにかなりの数の乱数を発生させなければならないので、かなりの計算時間を要する。若い人たちは知らないかもしれないが、当時はコンピュータのCPUがインテルのi386の時代で、計算が遅くて困っていたところ、Chrisが自分の隣の研究室を私に割り当ててくれて、そこに当時最も早かったi486の33MHzのパソコンを設置してくれた。それでも、SVモデルの推定には1週間近くかかったが、おかげで何とか博士論文を完成させ、Ph.D.を取得することができた。Ph.D.取得後、MCMCは時間がかかって大変なのもうやめようと思っていたが、その後、コンピュータが格段に速くなったので(昔1週間近くかかったSVモデルの推定も今では15分程度で終わる)、今でもMCMCを使っている。もしChrisに出会っていなかったら、今、何を研究していたかわからない。今の自分があるのは、Chrisのおかげである。

Chrisはイェールで大学院1年生必修のマクロ経済学の授業を担当しており、私はそのTAをやらせてもらった。正直言って、Chrisの授業は難解で、1学期間、ずっと横断性条件(transversality condition)の話ばかりしていたこともあった。ただ、TA sessionと呼ばれる補講では、Chrisの授業の内容をわかりやすく説明するだけでよかったので、TAとしては楽だった。

Chrisの業績は多岐に渡っているが、最も重要なのは多変量自己回帰(vector autoregressive; VAR)モデルに関する研究であろう。このモデルを用いると、例えば中央銀行が金利を下げた時にマクロ変数に時間を通

じてどのような影響を与えるかといった政策効果のシミュレーションを行えるので、単に研究者の間だけでなく政策当局にとっても重要なモデルである。ただし、VARモデルを推定するためには識別のための制約が必要で、どのような識別制約を置くべきかについてもChrisは多くの論文を書いている。また、VARモデルを用いた変数間の因果性の検定についても重要な研究を行っている。

ChrisのVARモデルの論文の中でも重要なのは、1980年に*Econometrica*に掲載された論文“Macroeconomics and Reality”であろう。そこで、その論文が掲載されてから30周年を記念して、一橋大学グローバルCOEプログラム「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」と日本銀行金融研究所との共催で2010年1月23日ー24日に一橋大学マーキュリータワーにて*Journal of Economic Dynamics and Control Conference on Frontiers in Structural Macroeconomic Modeling: Thirty Years after “Macroeconomics and Reality” and Five Years after “Nominal Rigidities and the Dynamic Effects of a Shock to Monetary Policy”*と題する国際コンファレンスを開催した。Chrisには基調講演を行ってもらい、僭越ながら、私とその司会を務めた。その時の模様は、Global COE Hi-Stat Newsletter ([http://gcoe.ier.hit-u.ac.jp/research/newsletters/pdf/newsletters\\_no4.pdf](http://gcoe.ier.hit-u.ac.jp/research/newsletters/pdf/newsletters_no4.pdf))にまとめているので、ご覧いただきたい。ノーベル賞受賞者を招聘するのは難しいので、受賞前に招聘できてよかったと思う。また、その時に相撲に連れて行って喜んでもらったことも良い思い出である。コンファレンスの参加者の中にはChrisと一緒に写真を撮っておくべきだったと後悔している人が少なくない。

その後、2011年5月25日ー27日にソウル国立大学とKorean Development Instituteが、Recent Developments in Dynamic Analysis in Economics-30 Years after *Macroeconomics and Reality*と題するコンファレンスを開催し、ミネソタ、イェール、プリンストンでのChrisの学生が参集した。もう一人のノーベル経済学賞受賞者であるSargent教授も来られていた。私も招待され、Chrisの専門であるVARモデルの論文を報告したところ、Chrisから鋭い質問を受け、青くなると共に学生時代に戻った気がした。現在、その論文はChrisのコメントを基に改訂中である。

私はこれまで主に資産価格のボラティリティを中心とした計量ファイナンスの研究を行ってきたが、Chrisの研究などにより、近年、マクロ計量モデルの推定にもMCMCが用いられるようになってきたので、遅まきながらマクロ計量分析も始めた。Chrisには到底及ばないものの、Chrisのこれまで行ってきた研究を少しでも

発展させられるよう頑張りたい。

本稿は、Hi-Stat Vox No. 21 (2011年11月10日)に初掲載されました。

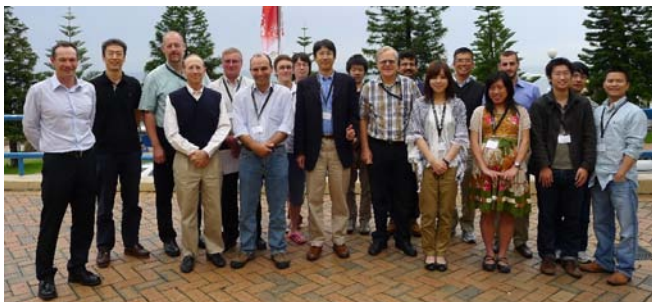
## Hitotsubashi-UNSW Conference on International Trade and FDI 2011 開催報告

笹原彰

COE フェロー

一橋大学経済学研究科

12月9日から12月11日にかけてオーストラリアのニューサウスウェールズ大学 (University of New South Wales; 以下 UNSW) にて一橋大学と UNSW 共催の国際貿易と直接投資に関するコンファレンスが開催されました。世界中から11名の研究者を招待してお互いに最新の研究の成果を発表し合い、特に10日のセッションでは石川城太教授と古沢泰治教授が報告を行いました。それに先駆けて開催された9日の院生セッションでは、一橋大学から坂本陽子、牧岡亮、そして私の3名、UNSWから2名の大学院生が、日頃の研究成果を報告しました。



(筆者は前列右から2番目)

9日は、「院生」セッションながら、メインのセッションで報告するほとんどの研究者が参加し、UNSWの院生も合わせると約30人の参加者の前で報告する機会に恵まれました。3名とも学外での論文報告の経験はあるものの、英語での報告は今回が初めてで、事前に2回集まって英語で報告し合い、自分が話す英語を暗記し、想定される質問にも戸惑わずに返答できるよ

うに想定問答集を作成しました。その甲斐あってか、報告後のレセプションでは、多くの研究者から及第点(を意味するような発言)を頂くことができました。しかし、英語での報告はできても、英語での質問やコメントの意味がよくつかめないことがあり、報告後の休憩時間にその質問やコメントについて再確認が必要なこともありました。そういう基礎的な英語力はこれから徐々に養っていきたいと思います。

10日と11日のメインのセッションでは、オーストラリアを中心に世界中から最先端の研究をしている研究者が集い、自分たちの研究成果の報告と、それに関する議論を活発に行う姿に強い刺激を受けました。ベトナム経済に関心のある牧岡は、Richard Baldwin教授にベトナム経済とセカンドアンバンダリング(第2の経済統合)の関係について、コンファレンス会場を出てからも議論を続け、さらにベトナム経済についての理解を深めたようでした。坂本も、彼女の研究領域に近い Arghya Ghosh教授と Alan Woodland教授の国家間の提携形成(貿易協定など)に関する研究に強い関心を覚えたようで、セッション終了後に積極的に質問をして理解を深め、自分の糧にしているようでした。私の場合も、Arpita Chatterjee教授の為替レートの変動と複数財生産企業の価格設定行動についての実証研究が、私の研究領域と非常に近いこともあり、とても強い刺激を受けました。彼女には、私の理論モデルの改善点について丁寧にアドバイスして頂き、実り多きコンファレンスになりました。

セッションの間の休憩時間にも、参加されている研究者や UNSW の大学院生と交流を持つことができました。特に UNSW の大学院生はベトナムや中国などから留学しているアジア人の学生が多く、それぞれ留学生としてシドニーでどんな生活をしているのか、どんな研究をしているのかなど、情報を交換し合いました。また、国際貿易だけでなく、国際マクロ経済学や実験経済学を専攻している学生も参加していたので、専門分野を越えてネットワークを築くことができました。

今回は、自分の論文を報告する機会、最先端の研究報告を聞く機会、第一線で活躍されている研究者と交流する機会に恵まれて、大変貴重な経験をすることができました。論文を報告して頂いたコメント・質問から自分たちの論文の質を高めていけることはもちろん、今回経験できたこと全てが、今後の研究のモチベーションを高め、今後の研究報告の質を高めてくれるものと思います。我々3名の指導教員である石川城太教授、

古沢泰治教授、UNSW の森田穂高教授、Arghya Ghosh 教授、Alan Woodland 教授、UNSW の院生で一橋大学石川ゼミナール出身の荒知宏氏には、コンファレンスの準備から、論文へのコメント、プレゼンテーションに関するアドバイスまで多岐にわたり御指導を受けました。感謝申し上げます。また、コンファレンスの運営から私たち3名の精神面のケアまで、様々な面でサポートしてくださった高田智恵子さんにも、この場をお借りしてお礼申し上げます。最後に、今回のコンファレンスをバックアップしてくださった一橋大学グローバル COE プログラムに感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

The Hitotsubashi-UNSW Conference on International Trade & FDI 2011 プログラム・報告論文

[http://www.econ.hit-u.ac.jp/~cces/COE2011\\_HP/program2011.htm](http://www.econ.hit-u.ac.jp/~cces/COE2011_HP/program2011.htm)

## ザンビア農村部フィールド調査報告

三浦憲

COE フェロー

一橋大学経済学研究科

私は2011年11月にザンビアの農村部でフィールド調査を行った。アフリカ大陸の南に位置するザンビアは調査時、ちょうど乾季から雨季に切り替わる時期であった。調査対象家計はこれからの耕作に備えて農作業の準備に忙しかったかもしれないが、快く調査に応じてくれた。

調査では、天候インデックス保険の販売実験を行った。天候インデックス保険とは、保険金の支払いが観察可能な天候指標（例えば降水量や温度）を基準として行われる。そのため、従来の保険で問題となるモラルハザードや逆選択の問題が緩和される。近年、インドやメキシコなど世界各地で導入されており、天候ショックを和らげるツールとして期待されている。私は Zambia Agriculture Research Institute (ZARI) と協力して、天候保険契約を設計し実際に販売してみることに

した。これは私の知る限り、ザンビアで初の試みである。



ZARI のスタッフによる天候保険の説明（筆者右）

我々の導入した天候保険は極めて単純である。まず調査地から最も近い測候所で計測された雨季（2011年11月－2012年4月）の累積降水量が600mmを下回る場合を「旱魃」、1000mmを上回る場合を「洪水」と定義した。もし「旱魃」か「洪水」が生起すれば、保険金が支払われる仕組みである。1口は5,000クワチャ（約US\$1）に設定し、最大20口まで買えるようにした。また保険料率は、公正な保険になるように20%に設定した。よって仮に10,000クワチャを払った場合、次の雨季が「旱魃」か「洪水」に該当すれば、50,000クワチャが来年の5月に支払われる。



来期の降水量に関する主観的期待（家計調査）

この保険をどのような個人が購入するのか、というテーマで論文を書こうと目論んではいるが、そもそも売れなければ研究にならない。実際のところ、農民の反応には少し不安であった。なぜなら、幾つもの負の要因が簡単に挙げられるからだ。まず、彼らは正式な教育をあまり受けておらず、自分の名前も満足に書くことが出来ない人も多い。次に、保険の概念は初めて聞く人にとっては難解である。調査地では銀行などの金融機関にアクセスする事は不可能であり、農民にとって初めて目にする金融商品である。よって保険の利益をすぐに理解する人は少ないだろう。さらに保険は掛け捨てであり、絶対的な所得水準が低い彼らにとって保険購入のハードルは高い。これらの理由が相まって、インドでの先行事例では、購入率はたった4%であったと報告されている。しかしインドの事例とは異なり、遠い国から来た外国人（私）がアシスタントと共に戸別訪問をして売りに行くのである。少々悲観的な予想を抱きながら、戸別訪問による販売初日を迎えた。

1家計目はJ・M氏であった。彼は村の中でも特に貧

しい。2010年1月に生じた豪雨により家を失ってしまった彼は、現在もお穀物貯蔵庫の下にレンガで囲いを造り、そこを寝床にしていた。彼のような天候ショックに脆弱な家計こそ天候保険から多くの利益を得ることが出来るが、彼の反応は果たしてどうだろうか。我々の調査では2回に分けて、保険購入の意思を聞く。まず保険を説明した後にすぐに保険プログラムに入りたいかを聞いた。私の期待に反して、彼は1口購入したいと答えた。そして、30分のインタビューの最後に保険契約を正しく理解しているかを試す質問を行った。彼は5問中2問間違え、保険の概念を完全には理解していなかった。先ほどの回答は、間違った理解に拠るのかもしれない。彼の間違った点を訂正した後、再度購入の意思を聞いてみた。それでもなお彼は「心変わりしていない」と答え、5,000クワチャを支払った。

その後も調査は順調に進み、最終的には101家計からデータを取ることに成功した。最終的な購入率は、当初の予想を遥かに上回る93%であり、平均購入数は2.9口であった。率直に言って、この結果には驚いた。もちろん、1口あるいは2口のみのお小額の購入をした家計が約60%である。よって購入理由の多くは、我々との「お付き合い」の要素が大きいのもかもしれない。しかし、4口以上買った人も30%に上る。4口買った家計は、保険金支払い時には100,000クワチャ受け取ることになる。この額は非常に大きい。ザンビアの主食であるメイズの価格は季節により変動し、特に異常降水の年は価格が高騰するが、そのことを考慮しても100,000クワチャあればメイズ50kgバッグが買えてお釣りがくるだろう。メイズ50kgバッグは、平均的な家族が1ヶ月で消費する量である。



家計調査に参加してくれた家族

このように調査は非常にエキサイティングなものだった。しかし、今回行った調査は出発点である。そもそも天候保険の研究は始まったばかりであり、多くの解明すべき課題が残されている。今後も数回の追跡調査を予定している。今後の調査設計および農民の行動に大きな影響を与える今回の保険金支払いの有無は2011年11月から翌年4月までの降水量によって決まる。遠く離れた日本からザンビアの降水量に思いを馳

せながら、この調査報告を閉じる。

[付記] 本調査では、グローバル COE 海外研究調査活動経費の補助をいただいた。ここに記して感謝の意を表す。また家計調査を手伝ってくれたアシスタントのカトゥンドウとエバンスにとっても感謝している。最後に、私の面倒な調査に参加してくれた 101 世帯の皆様とその家族に心からお礼申し上げたい。

## ディスカッションペーパー (2011年8月－2011年12月)

- No. 197 (August 2011) Kyoji Fukao and Toshihiro Okubo, "Why Has the Border Effect in the Japanese Machinery Sectors Declined? The Role of Business Networks in East Asian Machinery Trade."
- No. 198 (August 2011) 江藤圭也「中国の省別農工間製品相対価格と経済発展—所得格差分析に向けた地域特徴的経済指標の可能性—」
- No. 199 (August 2011) Ashish Arora, Lee G. Branstetter, and Matej Drev, "Going Soft: How the Rise of Software Based Innovation Led to the Decline of Japan's IT Industry and the Resurgence of Silicon Valley."
- No. 200 (August 2011) Daisuke Nagakura and Toshiaki Watanabe, "A State Space Approach to Estimating the Integrated Variance under the Existence of Market Microstructure Noise."
- No. 201 (August 2011) Norifumi Yukutake, Shinichiro Iwata, and Takako Idee, "Strategic Interaction between Inter Vivos Gifts and Housing Acquisition."
- No. 202 (August 2011) Kazuya Wada, "What Effect Does Female Autonomy Have on Child Health? Microeconomic Evidence from Rural India."
- No. 203 (August 2011) 随清遠「補償方式と補償規模の影響要因—中国の株式改革について」
- No. 204 (September 2011) Kazuharu Kiyono and Jota Ishikawa, "Environmental Management Policy under International Carbon Leakage."
- No. 205 (September 2011) Yuko Mori and Takashi Kurosaki, "Does Political Reservation Affect Voting Behavior? Empirical Evidence from India."
- No. 206 (October 2011) Zhao Chen, Ming Lu, and Zheng Xu, "A Core-Periphery Model of Urban Economic Growth: Empirical Evidence Using Chinese City-Level Data, 1990-2006."
- No. 207 (October 2011) Toshio Honda, "Nonparametric LAD Cointegrating Regression."
- No. 208 (October 2011) Yoshimasa Uematsu, "Asymptotic Efficiency of the OLS Estimator with Singular Limiting Sample Moment Matrices."
- No. 209 (October 2011) Yoshimasa Uematsu, "Regression with a Slowly Varying Regressor in the Presence of a Unit Root."
- No. 210 (December 2011) Kei Nanamiya, "The Wavelet-based Estimation for Long Memory Signal Plus Noise Models."
- No. 211 (December 2011) Eiji Satoh, "Nontransferable Water Rights and Technical Inefficiency in the Japanese Water Supply Industry."
- No. 212 (December 2011) Yoshiko Nagano, "The Philippine National Bank and Lending in Agriculture: 1916-1930."
- No. 213 (December 2011) Yoshiko Nagano, "The Emergence of Modern Banking System in the Philippines during the American Colonial Period."
- No. 214 (December 2011) Masato Ubukata and Toshiaki Watanabe, "Market Variance Risk

Premiums in Japan as Predictor Variables and Indicators of Risk Aversion.”

Global COE Hi-Stat Discussion Paper Series

<http://gcoe.ier.hit-u.ac.jp/research/discussion/index.html>

## 研究会 開催実績 (2011年7月－2011年12月)

第216回 (2011年7月27日)

第1回アジア KLEMS 会合

経済産業研究所、アジア開発銀行研究所と共催

第217回 (2011年7月28日)

第28回 G-COE リサーチ・ワークショップ

坂本陽子 (COE フェロー) “Self-Enforcing International Environmental Agreements among Asymmetric Countries and Welfare”

第218回 (2011年7月30日)

実証応用経済ワークショップ

日本大学経済学部、慶應義塾大学・京都大学連携グローバル COE プログラムと共催

第219回 (2011年7月31日－2011年8月2日)

The 1st Summer School on Analytical Political Economy: Equality and Welfare

現代経済システム研究センターと共催

第220回 (2011年8月6日)

Summer Workshop on Economic Theory

(国際経済学)

北海道大学で開催

第221回 (2011年8月19日)

社会経済史学会夏季シンポジウム “Rethinking Labour and Industrialization in Global Context: Occupational Structure, Economic Geography, Gender, and Migration”

大阪大学経済学研究科科学研究費プロジェクト「19世紀前半イングランドにおける女性の就業構造」と共催

Leigh Shaw-Taylor (University of Cambridge) “Industrialisation, Economic Development and Occupational Structure: Secondary and Tertiary Sector Growth”

斎藤修 (一橋大学) “By-employment, Gender and Sectoral Labour Productivity”

Jelle van Lottum (University of Cambridge) “Labour Migration and Economic Development in Global Perspective”

山本千映 (大阪大学) “Staying or Leaving? Gender, Job Opportunity, and Poor Law Administration in Nineteenth-Century England”

第222回 (2011年8月25日)

G-COE Hi-Stat セミナー “Occupational Structure, Human Capital and Economic Development in Historical Perspective”

大阪大学経済学研究科科学研究費プロジェクト「19世紀前半イングランドにおける女性の就業構造」と共催

Leigh Shaw-Taylor (University of Cambridge) “Economic Development and Structural Change since 1700: New Evidence in a Global Perspective”

Jelle van Lottum (St John's College, University of Cambridge) “Human Capital and Economic Performance in Europe before the Industrial Revolution: Evidence from the Maritime Sector”

第223回 (2011年10月5日)

グローバル COE セミナー

Nahm Joon Wu (Sogang University) “Asset Pricing Theory and the Valuation of Korean Paintings: A Semiparametric Model of Hedonic Pricing”

第224回 (2011年10月6日)

第29回 G-COE リサーチ・ワークショップ

森悠子 (COE フェロー) “Does Political Reservation Affect Voting Behavior? Empirical Evidence from India”

第225回 (2011年10月11日)

国際貿易・投資ワークショップ

TCER 定例研究会 共催

Andres Akerman (Stockholm University) “A Theory

- on the Role of Wholesalers in International Trade”  
 第 226 回 (2011 年 10 月 13 日)  
 第 30 回 G-COE リサーチ・ワークショップ  
 笹原 彰 (COE フェロー) “Two-sided Firm Heterogeneity, Random Matching, and Trade Liberalization”
- 第 227 回 (2011 年 10 月 25 日)  
 産業・労働ワークショップ  
 TCER 定例研究会と共催  
 Martin Hemmert (Korea University Business School) “Cultivating University-Industry Research Collaborations in Korea: The Role of Social Capital”
- 第 228 回 (2011 年 10 月 28 日 - 30 日)  
 The Second International Conference “High-Frequency Data Analysis in Financial Markets”  
 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)「金融リスクの計量化と統計的推測に関わる諸問題の解明」(代表者: 大屋幸輔) と共催  
 Torben Andersen (Northwestern University), Tim Bollerslev (Duke University), Peter Hansen (European University Institute and Stanford University) 他
- 第 229 回 (2011 年 11 月 1 日)  
 産業・労働ワークショップ  
 TCER 定例研究会と共催  
 西田 充邦 (Johns Hopkins University) “Explaining Reallocation's Apparent Negative Contribution to Growth in Deregulation-Era Developing Countries”
- 第 230 回 (2011 年 11 月 5 日、6 日)  
 第 6 回応用計量経済学コンファレンス  
 大阪大学グローバル COE プログラム、東京経済研究センターと共催
- 第 231 回 (2011 年 11 月 10 日)  
 第 31 回 G-COE リサーチ・ワークショップ  
 Dashtseren Khashbaatar (COE フェロー) “Bootstrapping the Largest Eigenvalue in Principal Component Analysis”
- 第 232 回 (2011 年 11 月 15 日)  
 産業・労働ワークショップ  
 TCER 定例研究会と共催  
 Dainn Wie (政策研究大学院大学) “Projection Bias and Divorce Cooling-off Periods”
- 第 233 回 (2011 年 11 月 19 日)  
 Workshop on Analytical Political Economy  
 現代経済システム研究センターと共催  
 Simon Mohun (University of London at Queen Mary) “Rate of Profit and Crisis in the US Economy: A Class Perspective”  
 大野隆 (立命館大学) “The Roles of Monetary Policy for Economic Growth: From the Viewpoint of an Endogenous Market Structure”  
 吉田博之 (日本大学) “Economic Intermittency in a Two-Country Model of Business Cycles Coupled by Investment”
- 第 234 回 (2011 年 11 月 24 日)  
 第 32 回 G-COE リサーチ・ワークショップ  
 牧岡亮 (COE フェロー) “Trade, Unemployment, and Reallocation with Search Frictions”
- 第 235 回 (2011 年 11 月 25 日)  
 Japan-Korea Joint Workshop “Workshop on Measurement Issues in Productivity Databases for Asian Countries”  
 科学技術研究費基盤研究 (S) 「日本の無形資産投資に関する実証分析」、韓国生産性センター、経済産業研究所と共催
- 第 236 回 (2011 年 11 月 29 日)  
 産業・労働ワークショップ  
 TCER 定例研究会と共催  
 田中隆一 (政策研究大学院大学) “Estimating the Effects of Pro-Natal Policies on Residential Choice and Fertility” (with Ryo Nakajima)
- 第 237 回 (2011 年 12 月 1 日)  
 第 33 回 G-COE リサーチ・ワークショップ  
 白田 康洋 (COE フェロー) “Formation of Decentralized Manufacturer-Supplier Networked Markets”
- 第 238 回 (2011 年 12 月 10 日、11 日)  
 The Hitotsubashi-UNSW Conference on International Trade & FDI 2011  
 Richard Baldwin (The Graduate Institute, Geneva), Arpita Chatterjee (University of New South Wales), Rodney Falvey (Bond University), Taiji Furusawa (Hitotsubashi University), Arghya Ghosh (University



of New South Wales), Jota Ishikawa (Hitotsubashi University), Carol McAusland (University of British Columbia), Phillip McClaman (University of Melbourne), Mark Melatos (University of Sydney), Xuan Nguyen (Deakin University), Alan Woodland (University of New South Wales)

第 239 回 (2011 年 12 月 15 日)

第 34 回 G-COE リサーチ・ワークショップ

萩原純平 (COE フェロー) “Model Averaging with Dependent Data”

第 240 回 (2011 年 12 月 21 日)

第 11 回パネル調査・カンファレンス

財団法人 家計経済研究所 主催、慶應義塾大学グローバル COE プログラム・大阪大学グローバル COE プログラム・東京大学社会科学研究所と共催

過去の研究会日程・報告

<http://gcoe.ier.hit-u.ac.jp/information/schedule/schedulelog/index.html>

## 受賞

### 景気循環学会中原奨励賞

本プログラムの事業推進担当者である渡部敏明教授が景気循環学会より中原奨励賞を受賞しました。11 月 19 日に行われた授賞式では、「MCMC のマクロ計量モデルへの応用」と題して受賞記念講演を行いました。

### 日本学士院会員

本プログラムが継承した 21 世紀 COE プログラム「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」の拠点リーダーである鈴木興太郎一橋大学名誉教授が、12 月 12 日開催の第 1054 回総会において日本学士院会員に選定されました。



Global COE Hi-Stat Newsletter No. 7 (January 2012)

編集・発行 一橋大学グローバル COE プログラム「社会科学の高度統計・実証分析拠点構築」事務局

〒186-8603 東京都国立市中 2-1 一橋大学経済研究所内

Tel: 042-580-8386

Fax: 042-580-8333

E-mail: GCOE-info@ier.hit-u.ac.jp

URL: <http://gcoe.ier.hit-u.ac.jp/>